

アルジェリヤに駐在して（1）

小林 静作

予科5-6

航空5-3

(横浜市)



まえがき

アルジェリヤはアフリカの北、地中海に面した旧フランス領地(1847~1962)であったところ。2013年1月には同国東南部のイナメナスにある国営企業ソナトラックをイスラム過激派が襲撃し、41人の外国人の人質を殺害したり、今年3月には隣国チュニジアでイスラム過激派が首都チュニスで日本人3人を殺害した事件があった。6月にもテロ事件があった。中東や北アフリカから目ははなせない。筆者はイスラム過激派が台頭し始めたころであるが、日揮の技術者としてアルジェリヤの日揮の天然ガス処理プラントに勤務した経験がある。筆者の講演を3月26日60期生会最後の幹事会で聞き、その活字化を依頼したところ心よく受けてくれたので、本誌に掲載することにした。(田村正夫)

1. アルジェリヤ勤務

私は1982年から1989年まで(但し1985年は8ヶ月中国勤務)天然ガス処理プラントのメンテナンス指導者としてアルジェリヤで働いていた。

勤務した場所は、首都アルジェ(地中海沿岸)の南350km離れた砂漠(土漠)のハッシ・ロンメル工場(国営)であった。

地中海沿岸の緑地は国土の10%で、人

口の90%はこの沿岸に住んでいる。緑地の南には、東西にアトラス山脈(2,000m級)があり、南に緩やかに下りながらサハラ砂漠となる。そこに私が働いていたプラントがあった。

このあたりは土漠で灌木があり遊牧民が家畜を追っていた。緯度は富山と同じ、標高約1,000mで、プラントは井戸から出る約300kg/cm²の高圧の天然ガスを減圧の過程を活かして低温にし、可燃ガスLPG、コンデンサイト(ナフサ)に分離し、夫々を輸出していた。

従業員は極一部の上級管理者のみ家族連れで、大部分の人は地中海沿岸の緑地からの単身赴任者だった。工場はアルジェリヤの外貨収入の半分を稼ぎ、高額の砂漠手当があり、選ばれた人、或いは多くの人を押しつけてきた人かもしれず、気性が激しいところがあった。従って私の経験は普通のアルジェリヤ人と違う人達と付き合ったのかもしれない。

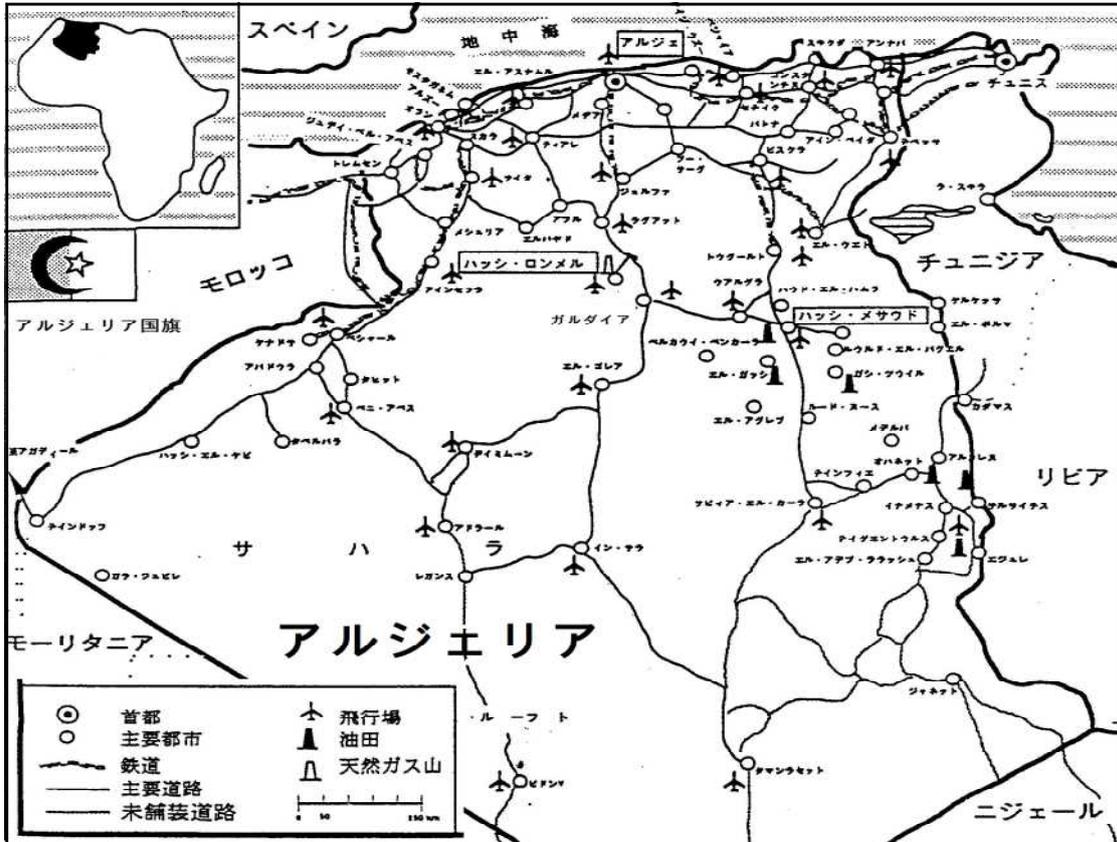
ハッシ・ロンメルガス田は、私のいた中央部3工場と、その北と南に25km離れて夫々1工場、計5工場があった。

1982年8月15日、日本を出て北極経由でパリ、アルジェを経て、ガルダイヤ(工場の南約130kmの世界一といわれるオハシス、人口10万人以上の町)の飛行場に降りた。日本人キャンプまで車で送られたが、途中橋は一つ(川に水なし)、交通信号なし、見た人は老人一人、灼熱の灰褐色の世界だった。車のシートは熱の為かひび割れで剥がれ、毛布が載っていた。JGCがプラント建設を受注して、建設の最盛期は約4,000人(一部フィリピン人)がいたそうだが、建設は終わり、運転指導者も帰り、メンテナンス要員のみで、私はその時、在籍89人目だった。

2. 世界は一つ 世界人は皆同じ

度肝を抜かれた砂漠だったが、私の職場

では日本人は私だけで、二人のアルジェリヤ技術者とともに、ハシル・ロンメルガス田の合計5工場で働いていた。



最初の最大のショックは、アルジェリヤは外国でありアルジェリヤ人は外国人であるということだ。彼らと話をすると、日本にいるときと同じに相手を尊重して、お前の言うことは「分かるが」と言って私の意見を言おうとしたら、私の「分かる」のみが採られて、相手は勝ったとばかり高飛車になり、対等の人間として扱ってくれなくなる。回復するには2~3回喧嘩をして勝たなければならなかった。彼等との喧嘩は彼等の間も同じで、お互い主張し合うだけで勝ち負けの結論は出さない。事実負けでも負けを認めたら仲間に入れて貰えない。彼等は常に勝たなければならぬ。彼等は髭を生やし自己を主張し、嘘をついても相手に負けまいと努力している。観光地の商人のようなウエルカムはない。話での鉄則はまず「お前の言う事はは分からない」から

始めなければならぬ。日本の様な思い遣りや心配りがなく、生きる努力に明け暮れている。また絶対に謝らない。謝りは敗北を表現するようなものだ。

教育を頼まれて教えてあげると、直ぐにベテランになったと周りに自慢する。次に頼まれたとき、責任者にあの者はベテランになったと言っているからやらせろと言ったら、責任者は嘘だ、皆と同じで信用できないと言う。皆が強がりと言っているから誰も咎めようとしぬ。この国の習性を知らないとならぬ。

3. 文化の違い

彼等は物を大切に修理して使うと言う考えが無いようだ。

① 修理工場の屋根のスレートが2枚程砂嵐で飛んだ。その下の部屋の技術者達は屋

根のある部屋に移った。1年経っても直さない。2年経っても同じだった。

② 修理工場のロッカーの扉が壊れた。この人は別の使えるロッカーに移った。別の人も同じく使えるロッカーに移った。次々と使えるロッカーに移り、扉の開いたロッカーがどんどん増えて行った。直そうとしない。

③ 耐圧防爆型の小型電動台車が5台あった。電池が消耗して速度が歩く人より遅くなったがそのまま乗っていた。停まったら電源スイッチのノブをプライヤーで更にONへと回しスイッチを壊してしまい乗り捨てて行った。充電の発想がない。

④ 修理工場の冷房は集中方式でダクトで各部屋に冷風が送られる。着任は8月で冷房が利いていた。秋、冷房は停められ、翌年4月になり暑くなり、冷房担当者は冷房を動かそうとしたが動かず、5月になっても成功せず、アルジェの専門家に来てもらい漸く動いた。皆汗が流れても我慢していた。所が翌年もまた1ヶ月皆汗を流した。翌々年も同じだった。日本だったら秋停める時、翌年のことを考え点検するし、不調なら修理をする、更に春になれば3月に試運転をして夏に備えるのが普通だが。

⑤ 同部屋の若者の許婚が大学に行っており、ノートをとる代わりに小型のテープレコーダーが欲しいと言ったので、休暇(半年に5週間の休みで帰国出来た)の時日本で買ってきてプレゼントした。翌朝テープレコーダーが動かないという。聞いたら一晩中使っていたとのこと。事情が分かったので次の休暇のとき交流電源から取れるアダプターと電池を買ってきてあげた。

これらのことから考えると、生まれと育ち即ち文化の違いがあることが分かった。日本は農耕民族で村の存続や皆が生きて行くため、種籾の準備から始まって、年間の計画や翌年以降を踏まえた連続の見通し、

即ち必須の水や、労働力、資材の調達等村人は団結し、また自然災害への対応も考慮して神仏を祈りながら働く。

これに対し彼らは遊牧民族で家畜の餌になる灌木を求め広大な土漠を誰に気兼ねすることなく移動している。彼等は考えるよりアラアの神を頼り、灌木の成長、砂嵐、バッタの大群の来襲等全て神の思し召しとしている。正に砂漠に根を張った生活である。彼らの身上は、そこに有る物をとる、使う、早い者勝ちと自由だ。(続)

平成28年1月号 秩父 130号

アルジェリヤに駐在して(2)

小林 静作 予科5-6
(横浜市) 航空5-3

前回の駐在記は、日本とアルジェリヤとの文化の違いについての記述が主だった。今回は滞在するまでは余り知らなかった砂漠についての記憶を辿ってみた。

1 砂漠

◆日本では、鳥取の砂丘、九十九里浜がモチーフになった「月の砂漠」が砂漠のイメージと思われるが、滞在した砂漠は灌木のある土漠で、アメリカの西部劇に出てくる様な瓦礫の荒土だった。首都アルジェより約350km南で、アトラス山脈を越え塩湖地帯を過ぎ、起伏のある(地層に褶曲のあるところに石油やガスがある)砂ではなく土漠だ。標高は約1,000mで緯度は日本の富山と同じで、季節による太陽の出没は日本と同じだった。しかし気象は全く別だった。夏は暑い時で45℃(時には寒暖計の目盛の50℃を越えた)夜でも35℃でクーラーなしでは眠れなかった。そんな時は、雲一つない全くの晴天、太陽が憎らしい位

だった。現地人が眼だけを出した衣服で全身を覆うのが理解出来た。但し風は殆ど何時も吹いていたので、蒸れる感じなく、風の強い時は遠くが霞んでいた。夜は、普段は風が治まり満天の星空で、地平線まで星が見え、突然星が出たり没したりで砂漠ならではを実感した。

車は日射で高温になり、合成皮革の内装は、劣化して割れてチリチリになり剥がれていた。ハンドルは熱くて手袋なしでは触れられなかった。試しにボンネット上で目玉焼きが出来るかやってみたが駄目だった。工場の幹部達はキャンプと工場に屋根付きの駐車場を持っていた。正月に出勤するときは、窓ガラスに霜が降り、木片で掻き取り防寒衣を着て出かけ、昼食でキャンプに帰るときは、30℃位になり防寒衣はいらない。年中暑いことが多く、冬の夜は寒かった。

秋に渡り遅れた燕はキャンプの街頭に暖を求めて集まり、寒さが早く日中気温が上がらないときは帰れず命を落とした。

◆時には嵐が来た。風だけの砂嵐と、雨及び雷を伴った嵐があった。砂嵐は日中でも暗くなる程砂を巻き上げ、丁度雪国の吹雪で雪が横に飛ぶように砂が飛んで行った。キャンプの部屋は約30cm角の窓と空調機取り付けの窓だけだった。ガムテープで入念に密封したつもりだったが細かい砂が侵入し、嵐の度毎掃除が必要だった。又砂嵐の砂は窪地を埋め、時には低い道路を隠す様に埋め、まるで平原のようにして終った。車を動かすときは、道路を探し砂の吹き溜りに入らないよう注意が必要だった。雨、雷の嵐のときは、砂漠には河川がないので褶曲する平原の低所に沼が出来た。更に雨が続くと緑の低い所から溢れて砂を削りながら流れた。雨が続くと次の低地へと流れて沼は大きくなり道路まで壊したことがあった。この沼は嵐が去れば、灼熱の日射で

蒸発し元に戻って終う。

サハラにガス、石油が出るのは、一説に由れば昔サハラは樹木の茂った緑地で動植物の繁栄した時代があった。それが海底に沈み堆積時代を経て、隆起して砂漠化が進み現代の広大な砂漠になったと考えられる。しかし飛行機で空から見たら水の流れた様な谷がなく、河もない。アラスカから北極越えて欧州へ行った時も、成田からシベリヤ経由で欧州に行った時も眼下には谷があり、うねりながら流れる河があった。樹木があり雨が あったら大地に河ができ、山を削って谷が出来たと思う。

サハラ砂漠は海底から隆起した後、緑地になった時代がないのではと思う。河川がない。

しかし工場や住居の排水は、人が生活している限り必要だ。土漠に沿って追ってみると、工場やキャンプから相当量の水が川のように流れていた。流れの両脇は植物が根付き、流れの先は土漠に水は吸い込まれていた。しかし流れの先は日々伸びて行った。人間が使う水の量からすれば、天然の雨は桁違いの水量と思われる。サハラ砂漠に遊牧民がいることは、砂漠に水があることで、アトラス山脈を越えた南は緩やかな下りとなり、サハラ砂漠が延びて所々に泉がある。サハラ砂漠は、地表は砂漠だが地下には川があるとのこと。その川の水が所々に泉となって地表に出て、遊牧民の井戸水になっているとのことだ。

◆気象と直接関係がないかもしれないが、バッタ(蝗)の大群が砂嵐の襲撃の様に空を覆ってやってきた。何故異常発生するのか分からないが、砂漠の異常温度が増殖させるのかもしれない。被害を受けた車のウィンドウはバッテリーが杯付着してワイパーは動かず、潰れたバッタの油でウィンドウの掃除は大変だった。バッタを駆除するため、空から駆除剤を散布する飛行機がきた。し

かし散布後の飛行機は、着陸時バッタの死骸のためスリップして滑走路をオーバーし、転覆してしまった。一般道路でも死んだバッタは車をスリップさせ交通事故になった。しかし無慈悲なはずの太陽はバッタの死骸を乾燥させ、風が吹けば無限大の砂漠の砂になっていった。

◆通常、口、鼻、目には蠅が水を求めてやってきた。しかし真夏になると食堂を除いていなくなる。蚊もキャンプ室内を除いていなくなった。まるで夏休みみたいだ。厳しい暑さに耐えられないのだろう。灌木は熱さに対抗するため、花は虫眼鏡でみれば、ブロッコリの様に葉も含め小さく集まって固まっている。昼夜の寒暖の差で、空気中の水分が露点以下になり、水滴ができて、枝幹を伝って根に流れて植物を育てていると思われる。ポンプ等に使われるボールベアリングは倉庫に保管されている間に、日本で検査され、グリースを塗って包装された新品が、昼夜の温度差で水滴が出来て腐食していたことがあった。新品のベアリングでも交換時は必ずグリースを洗って検査確認をした。「乾いた砂漠」の概念に空気中の水分が昼夜の温度差で結露することを加えるべきだと知った。

2 日本人キャンプ

◆JGC（日揮）がプラント建設時（最盛期は4,000人が働いていた）のキャンプの1部が日本人キャンプとして使われていた。他の大部分のキャンプはアルジェリア人のキャンプになった。建物は港でよく見られる物流のコンテナの様なボックスで、中央が通路で片側に2部屋、冷蔵庫置場及び図書部屋、さらに2部屋、両側で計8部屋があった。一端に入口、他端はトイレ、洗面所と洗濯場があった。設計は1部屋2人だが住人が減ったので1人で使用できた。住居棟の他に、レセプション（キャンプの事務所）、娯楽室、風呂、食堂、図

書室の棟があった。私が入ったのは日本人89人目だった。テニスコートもあった。

◆レセプションには郵便棚があり、昼食の時キャンプに帰れば、誰もが日本からの郵便をみる。キャンプ責任者が朝皆が出した郵便を郵便局にもって行き、届いていた郵便を受け取って帰り、郵便棚の各自の所に仕分けしてくれる。自分の棚の郵便を見つけて歓声があがる。大の男らしくないかも？

人によっては記録を狙って毎日の手紙を望み、コンジ（現地では休暇のことをコンジという）まで後何日続けば満願成就だと、恥ずかしさ半分、自慢半分で上機嫌だ。人によっては、日記の代わりとその日の状況全般を手紙に書いて、毎日出していた。日本に帰れば手紙がそのままアルジェリア駐在記になると言っていた。但しその人には毎日の返信はなかった。毎日の手紙を求めるには作戦も必要だ。経験と周りのアドバイスを生かし、封筒も地味なものとし、切手は桜、富士山等受取人以外が欲しがらなものは避け、なるべく数字のみの物を選ぶよう家族に伝えていた。途中で抜かれて終うからだ。遠く離れても心の繋がる不思議な糸があり、こんな所にも日本とアルジェリアの違いがあった。郵便がこの有様で、砂漠では皆日本（家族）が恋しい。郵便以外の大事な物も同じで、珍しいものは途中で抜かれて終うので、コンジが終わり戻って来る人にハンドキャリア（手荷物として持参する）で運んで貰う。重要書類は勿論、但し例外は、皆が使うシャワーの電源ヒーター（大きい）も運ばれた。これは盗まれるからではなく、シャワーが緊急を要したからだ。大勢のJGC関係者が乗るので、成田でハンドキャリアで重量オーバーになっても、会社間の清算で解決することのこと。成田を出るときは会社関係の部品等も含め重量オーバー金の心配はなかった。帰りは

個人負担なので神経を使った。

◆食事は日本食で、寝台特急で知られる食堂車の元コックが腕を奮ってくれた。米はアメリカから上質なものを船で輸入していたが、人数が減り在庫が無くなり再注文したが、アメリカは少量は儲けがないとのことで、日本より「こしひかり」を他の荷物と混載で船で購入することになった。ご飯は気圧の低い分マイナスだったが日本人には有難かった。4,000人の労働者は米、味噌汁、梅干しが必須で、その習慣が残っていて助かった。肉はイギリスの専門業者から牛肉を大物のまま購入して、キャンプの1ボックス（居住棟）の冷房を全開して冷凍庫代わりにしていた。キャンプは首都アルジェより南下する国道1号線の近くだったので、砂漠を南下する日本人冒険家が、帆を付けた自転車で来たことがあった。彼は日本食と日本人に飢えており、我々は隔離されたような環境だから、変化、ニュースが欲しいので、お互い補完し合う様になり大歓迎となった。

◆キャンプで野菜作りがはやった。しかし皆は出来ない。砂地で農耕は無理な筈だが、建設が終わり時代が運転、メンテナンスに変わった。働き者の日本人はキャンプ生活で時間を持て余し、畑作りを始めた。砂地を掘り、バキュームカーで糞尿を運んで入れ、水を遣り、草が伸びれば刈って入れ、次第に「土」に改良した。次第に野菜が出来るようになった。

砂漠勤務の契約が終わり所謂地主が帰国した後、残る人に跡継ぎ希望者が多いが、順番待ちで地主になれた。

休暇で帰国したとき野菜の種を買ってきた。先人の後を追いつながら第一は水遣りだ。朝4時起きで始める。多量の水を遣るため畝の両側は深く掘って溜まるようにした。昼食に帰れば先ず畑に行き水を遣って昼食とし、夕方7時半に帰れば第一に水を遣っ

た。

キャンプの周囲の境界の柵にユウカリが植えられていた。樹高は約20mだった。ユウカリの近くの野菜は育たなかった。10m位離れていたが掘ってみたら、ユウカリの根が張っていた。砂漠で生きるため、予想外の生命力が働いていた。勿論養分も吸われていた。枝豆を食べようと植えたが一枝に二莢しかならなかった。性が合わないのかも知れない。

ほうれん草は一回目は育ったが、同じ所の次の栽培では葉が丸きり育たない、これは連作のせいだと教えられた。日本と同じく出来たものは、大根、蕪、人参だった。最も楽だったものは、蕪で、一度植えると後は育てば刈るだけで、水さえやれば高温なので直ぐ育って刈れた。

収穫物は食堂に出し皆で食べた。野菜、卵、果物等の大部分は、レセプションために車で買い出しに出た。

◆キャンプ生活は、日本と違い残業、休日出勤、会議もなく定刻通りだった。

TVはアラビック、フランス語で、映像は同じバックでニュースを男女アナウンサーが交互に喋るだけで分からない。

あとはコンジから帰ってきた人が日本から持ってきたDVDと日本の新聞を見ることが楽しみであり時間調整だった。従って日本から帰って来るときは、各自種々好きな本を持ってきた。帰国するときには航空運賃の関係があり、殆どの人は置いていった。それが各棟及び娯楽室の膨大な量の本だった。隼、零戦、B29、疾風等単行本は真っ先に読んだ。キリスト教、仏教も読んでみた。「日本人」という本には共感を得た。帰国して探したが見つからない。砂漠駐在で本を読む習慣が出来たかと思ったら、帰国後はTVに戻ってしまった。しかし日本では時間に追われ、帰宅しての時間が欲しいと思っただが、時間を持て余す経験

は又贅沢かもしれない。キャンプの中には法華教の信者がいて法華教の太鼓を持参して毎夕太鼓を打っていた。信心の足りない者として仕事上と違う彼を尊敬した。

◆イスラム教は毎週金曜日が休日だ。時にはキャンプでバスを出してくれ、約130km南の世界一のオワシスといわれるガルダイヤ(人口10万人以上の商業地、後に空港が国際空港になり観光都市にもなった)に出かけた。この町で初めて交通信号を見た。初めて見る町で、子供がいるし、布を被った女性をみた。大きなモスクがあった。金の加工販売店が多かった。アルジェリヤ男性は嫁を貰うとき女性の親に大金を払う必要があった。男性の砂漠勤務はこの金のためだとか。聞いてみると、親は娘のため男からの金で金製の首飾り、腕輪、髪飾り等を買って娘に持たせ、娘の将来の対策を考えてのこと。

工場で或幹部が日本からテープレコーダーの部品を買ってきてくれと言う。外資を持っていないのでと金製の腕輪をもってきた。奥さんに散々頼んだと言っていた。

◆時間潰しに役立ったのは蠍(サソリ)の飼育と、コンジの時の土産に蠍のペンダント(日本から透明の樹脂を買ってきてきて蠍を固め、整形、透明になるまで磨く)作りだった。先ず蠍捕りで、コーヒーの空瓶(蓋は空気穴を明けたもの)と皮手袋を持って車で出かける。車道の周辺に幾らでもいるので、1km行った位で、小石を動かせば簡単に見つかり皮手袋で掴む。蠍の毒針は皮を通さない。問題は餌だ。死んだ物は食べないので、蠍飼いは休日なしだ。毎日働いているので外に出て餌取りはできず、餌は蠅しか無かった。夏、蠅は食堂にしかいない。即ち外の蠅は夏休みだ。コックさんに頼んで食堂に入り手で掴む。これも先輩から教わった。止まっている蠅の尻側より蠅の飛び立つ方向に合わせて手の平を払って

捕まえる。逃げられないように羽を取ってコーヒーの空き瓶に入れ、時々給餌する。

3 休暇(コンジ)

◆砂漠勤務は、殆どが(日本人は勿論)単身赴任だった。昼飯は夫々キャンプに帰った。又家族の下に帰るコンジがあった。日本人は半年毎5週間の休暇で帰国した。各自自分の部屋にカレンダーを貼り、次の帰国の日を記し、砂漠に戻った日から毎日を消していく。何故か小泉今日子のカレンダーが多かった。3ヶ月前からJALの予約が出来るので申し込んだ。希望の席はビジネスクラスの最前席で、丁度非常扉の有るところで座席間隔より広いから足を伸ばせた。その真ん前は飛行機の着陸時のCAが座る席だ。CAが夜など暇な時は着席している。雑談が始まったり、非常口は暖房の利きが悪く寒いからと余分に毛布を持ってきてくれた。昔航空兵の卵だったのでコックピットを見たいと言ったら、機長に話をしてくれて見学が実現した。パイロット達は空の先輩と言って種々説明をしてくれた。

ロンドンから北極を越え、煌々と照らされたアイスランドのアメリカキャンプを左下にみながら、アンカレジに向かった。キ84、キ100など質問が飛んだ。彼らは戦中の日本の飛行機を知っていた。

6年間の12回のフライトでJALからエヤフランスになったことがあった。約100人の人がフランスと日本を年2回往復するので、航空会社にとって欲しい客だ。航空運賃はアルジェリヤ持ちだった。それでエヤフランスが昔の宗国のコネを使ってJALからエヤフランスに変わったと言う。乗ってみたら、高齢の日本人は会話が出来ないと思ったのか、CAは私に対しては何事も素通りにした。他の客には疲れを労うのか笑顔を振りまいていた。ビジネスクラスなのにメインデシュの肉の焼き加減も聞かず、ただ置いていった。僻んだわけで

はないがJALで大切な客扱いをされた何時もを思いだした。JALの座席の広報誌に連絡用紙が入っているので、エヤフランスのアルジェリヤ活動を知らせ、アルジェリヤの会社と交渉して日本人はJALを望んでいるからJALにするよう頼んだ。砂漠を出てドゴール空港でJALに乗り込む時は、搭乗口でJALのCAが並んで「お帰りなさいませ」と迎えてくれる。日焼けした顔で、普段着だし何処から見ても当時もてはやされた「産業戦士」だ。砂漠で目以外布を被った女性しか見ていないし、優しい日本語が聞けた時は日本に帰るんだと実感した。エヤフランスと比較にならない。再びJALになった。通関のとき外国人用の赤い絨毯を踏んで入り、パスポートのチェックを受け、「御苦労さま」と言われた。

◆コンジでアルジェリヤに帰るときは、辛子明太子、虎屋の羊羹(砂漠で1週間おいても劣化しない)、成田で通関後、免税店でサントリだるま一瓶を買い、持参のステンレス魔法瓶に詰める。(アルジェリヤでは酒の持ち込み禁止のため)水は貴重品なので魔法瓶は調べられない。

パリに着いたらニッコウドパリの隣のスーパーで生ハムを買い、ホテルでサービスしてくれる朝到着の日本の新聞(買えば高額)を持ち砂漠へ出発する。

砂漠では友(カマラドという)が待っていて、夕食後娯楽室で宴会をやる。念のため、宴会はコックさんの勤務時間を終えてからだった。

◆日本人を含め外国人には、アルジェに行けばアルジェリヤ製のワインとビール、野菜類も買えたので、レセプションの人が時々車で買い出しに出かけた。又アルジェリヤの北東部地中海近くで松茸がとれた。松茸買いも車で出かけてくれた。帰ったときは松茸のフルコースが食べ放題だった。

何も無い砂漠で現地の金でビールとワイ

ンが買えたことは、働く日本人にとって命綱だったと思う。(続く)

平成28年4月号 秩父131号

アルジェリヤに駐在して(3)

小林 静作 予科5-6
(横浜市) 航空5-3

4. イスラム過激派の脅威

◆次第にイスラム過激派の危険が迫ってきたが、彼等にはその都度の利益だけでなく、イスラム教のための大団結を期待したい。

ハッシメサウドプラント勤務の1999年頃は、アルジェリヤは民間航空の就航はなくチャーター便のみで、プラントは空挺隊、歩兵、憲兵で守られていた。近くの過激派が民家を襲っているとの情報で、警備隊が出動命令を受け、出発準備をしていた。何時も熱いので軍服を脱いでいるのに、完全軍装で、各自の引き締まった顔は「戦」を感じさせられた。因に車はトヨタの戦闘車で、前二列が兵員。後は荷台で機関銃が据え付けられていた。

5. アルジェリアにおける新しい風は?

アルジェリヤ駐在中は、TVはフランス語とアラビア語で分からないので、短波ラジオを頼りにしていた。日本語放送は日本から直接と欧州西部のガボン国中継と2通りあった。日本直接は稀にしか聞こえず、ガボンは休日(イスラム教は毎週金曜)しか時間の関係で聞けなかった。

アルジェリヤは昼休みが3時間あるので、ラジオを操作していたら日本語が聞こえてきた。それは西ドイツ(当時は統合前)のドイッチェベレ日本語放送(毎日昼の3時間)だった。聴いてみると、日本では聴いたことのない所謂、海外情報だった。ア

ナウンサーは日本人女性で、日本国内のアナウンサーと違って国や放送業界の縛りが無いようで、欧州内のことや世界のことを伝えてくれた。イギリスの頑固さ、フランスの小狡さ、ドイツの弱腰、イタリアの無責任等があった。

アルジェリヤ駐在中に若者に変化を求める発言があった。1つは喜捨に対する考えの改革で、コーランにないのに罷り通る悪習で平等にすべきと言っていた。

2つ目は若者がアルバイトで働いたときの話で、石油で裕福になったクエイト人は「朝起きて食べて寝るだけ」で全然働かない。働くのは外国人労働者だけだと不平等を嘆いていた。更に石油の富をアルジェリヤはガス田開発、セメント工場建設等に使い、将来を考えている。産油国の中には軍備増強に奔走している国が多い。軍備増強より人は皆働くべきで、石油の富を人が働ける様に使うべきだと言っていた。

1989帰国するとき、イスラムの諸国に変化が起きるかという明るい希望を持った。ところが実際の動きは次の様に期待から外れるものが多い。

6. イスラム圏諸国の現状

◆イラク

フセイン大統領はクエイトに進軍した。連合国の追放作戦(湾岸戦争)でイラクは逃げる。そのとき油田は破壊され火をつけられた。しかし2年位で復興した。石油があり仲間喧嘩をしなかったためだ。

◆アメリカで同時多発テロが発生

アフガニスタン戦争が始まり、新政権が出来た。しかし石油が出ないし、工業は無いし、農業には人、金、日時が必要だが出資者は回収のメドが立ち難く、欧州諸国は付き合い程度の支援しかしなかった。欧州の予測通り農業の復興は進まず、再び農民は麻薬栽培を始めたとか。アルカイダは麻

薬を買い上げ売ってテロの活動の資金にしているとのこと。石油の有る無しの不平等が見える。

◆イラク戦争勃発、

石油と云う宝があるのに、スンニ派、シーア派で争って復興、平和を遠くしている。イラクの現大統領はシーア派で、故フセイン大統領(スンニ派)がシーア派を弾圧した反動で今の大統領があると云われている。今問題になっている「過激派IS」はスンニ派でアメリカが駐留時、拘置所に入れられ、拘置所で学習していたと言う。現大統領がアメリカが撤退後釈放したという。平和は殆ど進んでいない。

◆パレスチナのアラハト議長が亡くなった。チュニジアを始めとして「アラブの春」が訪れた。エジプトでムバラク大統領失脚、リビアのカダフィ大佐失脚など続いた。

◆ウクライナ問題発生

ロシア軍参入でアメリカ、欧州各国が対抗処置開始。

◆シリアで大統領反対運動始まり、「過激派IS」が発生、世界中を震撼させている。

以上のように明るい見通しから外れてしまった。

7. アラブ連合の未来は？

視線を変えて見ると、正確に覚えていないが、昨年OPEC(石油輸出機構)が産油国間の生産量の相談をした。TV、新聞は石油の価格保持のため減産するだろうと報じた。所が減産しないので報道各社は疑問視した。半年程経っての報道はアメリカのシエルオイルの生産停止や、破産、投資計画の断念だった。原油価格は半分だ。また報道ではロシアの天然ガスの価格が下がり、モスクワでは、ルーブルの価値が下がって物価が2倍になったと言っている。近頃の新聞で「住友商事」はシエルオイル等資源商売の失敗で赤字転落と出ている。

これから報道各社はOPECの狙いはアメリカ叩きだったかとアラブの強かさに驚いていた。

ドイツチェベルの放送で欧州ではソ連軍に対抗するためアメリカを含めたNATO(北大西洋条約機構)という軍事同盟があり、今も続いている。又アメリカの食糧の安値攻勢に対抗するために欧州連合(今の欧州通貨ユーロの連合と違う)があり、拠出金の出し方など聞いたが覚えていない。要は集めた金を欧州各国に農業の大きさに分配して、アメリカの安い農産物が入っても農業が潰れないようにした。分配金でイギリス、ドイツはフランスと容易に合意が出来なかったと言っていた。ドイツは前の大戦の付けを負わされた感じだ。先日ドイツのメルケル首相が来日して、日本に忠告まがいの話をして、ドイツは隣国の好意で非難されないとやった。農業分配金で付けを済ませている。前の大統領もその前も野党の方が多数でも大統領が勤まったのは、イギリス、ドイツと交渉してフランスを有利にしたからという。2年前位、TV報道でフランスの農家の収入の40%は配分金との事だ。

アルジェリヤの若者はイスラム教を世界一にしようとしている。石油は東アジアを含めて多くのイスラム教の国々が持っている。同じアラブの神を崇拜している。今回のOPECの全世界を動かした力(腕力、財力、知力、統制力)は国連(国際連合)を越えている。アラブ連合といった様な連合を作り、食糧の欧州連合がやっているように金を集め、アラブの神の力を貰いアラブの知力、財力を結集すれば石油の富を分配し、全員が働く社会が出来るかと思う。(完)